

Crosscultural Communication

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/18139

異文化コミュニケーション論

楠根重和

一 前書き

人間はコミュニケーション無しで済まず訳にはいかない。人間の接触のあるところでは、そこに好むと好まざるとコミュニケーションは行われている。国や文化を越えてのコミュニケーションにあつては、この事情はもっと複雑になるに違いない。また、異文化コミュニケーションは全人格的な営みであり、いろいろな場面、反応、側面を含んでいる。そのために、様々な分野からのアプローチが可能である。そのことは異文化コミュニケーションについて書かれた著者たちの様々な経歴からも窺える。政治学、社会学、法学、経済学、文化人類学、心理学、言語学などの専門家は言うに及ばず、留学生、一生活者も、異文化コミュニケーションに言及している。これらのコミュニケーション論は、それぞれの関心から、その重点の置き方が異なっているのは避けがたい。そのためであろうか、異文化コミュニケーション論を全般的に取り扱う論文は、意外に少ない。個人的なエピソード、感想のたぐいが大半であるといつても差し支えない。「異文化コミュニケーション論」というよりも、単なる「日本人論」であつたり、海外生活の「ノー・ハウ」であつたりする。

異文化コミュニケーションについては、右で触れたように、その領域が広範囲であるだけではない。誰もが、一度ならずそれを自分の問題としており、それぞれの立場から、それについて語り得るのである。どの分野にあつ

でも、一度外国に出れば、異文化は新鮮な驚きとして受け止められ、異なったシステムに対応すべく、自己変容を余儀なくされる。また、自己変容を受けなければ、深いレベルでのコミュニケーションはおぼつかない。そのような体験をした人は、そのノウ・ハウを是非知らせてみたい、あるいは自分の失敗を繰り返させたくないと思うのは当然である。先人のこのような努力の跡を追いながら、異文化コミュニケーションを巡るさまざまな問題を扱うことで、一方において、この問題の広がりを示すとともに、他方において、異文化コミュニケーションを、「異文化コミュニケーション論」として、体系的に提示することができれば、この論文の目的は達成されたことになる。

二 異文化コミュニケーション

異文化コミュニケーションと文化内コミュニケーションも、本質的には同じものであると主張すると、不思議に思われるかも知れない。もしそうなら、なぜことさら異文化を強調する必要性があるのか、との反論が出てくるかも知れない。話者が同一の文化圏、言語圏に所属している場合でも、コミュニケーションが必ずしもうまく行かず、感情的にもつれたり、不快感を感じたりすることは、日常的によく体験することである。価値観や、相手に対する利害、感情が、文化や言語の共通性にもかかわらず、意志の疎通を困難にしているのである。しかし、異なった文化、言語を持つ人が出会う、コミュニケーションを行う場合は、文化と言語を共通とする人が出会う場合と比較して、一層多くの困難が生じる。

ところで、私たちは文化という言葉を出すが、一体文化とは何であろうか。私たちは紛れもなく何らかの文化に所属しているのであるが、一体文化に所属するとはどういうことなのかを次に考えてみたい。

1 文化とは何か

文化と呼んでいるものは、なかなかその実体が捉えられないし、文化が何かということに関して様々な定義がこれまでになされてきた。タイラーによれば、「文化または文明とは、民族誌学的な意味では、知識、信仰、芸術、道徳、法律、習慣、その他社会の構成員としての人間によって修得されたすべての能力と習慣の複合総体である」(古田 2 P.23)としている。また、シュミッツによれば「文化とは、学ばれ、受け継がれ、人間の態度、行動、思考をコントロールし、刻み込む規則の総体である」(P.20)とされる。文化は修得され、世代を越えて受け継がれるものである限り、それ自体が、時代の変化とともに変容を受けざるを得ないことになる。しかも文化は、国境や、民族と一致するわけでもないし、かりにそれが一致しても、文化は一義的に理解されるものではない。ある国の文化といっても、地域差があるであろうし、主流の文化(main culture)だけではなく、サブカルチャー(sub-culture)や、あるいは主流の文化に対抗する対抗文化(counter culture)といったものもあり、またこれに、地域差、個人差、世代差も考慮すると、ある国の文化といっても、これがそうだと具体的に示せるものでもない。いやむしろ示せるとしたら、示せること自体が問題となるかも知れない。よほど文化統制が行われているに違いないからである。しかし、ここに避けがたい問題が生じている。私たちは自己がある文化に所属していると言い、それを自明の前提として話を進めることが多いが、よく考えてみると、誰もが理想的にその文化を代表している訳ではない。したがって、異文化コミュニケーションと言っても、実質上は文化の理想的な、あるいは平均的と言った方が適切かも知れないが、代表者ではあり得ない個人と個人の対面の場で、極めて特殊な接触が行われているのだが、もし何らかの形で、コミュニケーションの齟齬が生じたりすると、それぞれが想定する文化と文化の摩擦にその原因を捜すことになる。どの程度までが個人の特殊性に起因し、どの程度までがその背後にある文化の違いに起因するのかの検証なしで、すべて文化差にその原因を求めたり、あるいは個々の事例から一般化して、それを文化差だと、無条件に断定する誤りをこれまで犯してこなかっただろうか。コミュニケーション齟齬

を文化摩擦に解消しようとするメカニズムそのものを問題視するところから出発しなければならぬ。また、後の方でも触れるが、文化を余りにも固定的に考えることが、逆に不必要な文化摩擦を引き起こすことにもなる。しかし、また他方、厳密な意味で、ある文化を理想的に代表する人がいないからといって、その文化の存在そのものを簡単に否定できるものではないし、また各人が信じる文化によって自己が形成されているのも事実である。完全な標準語を使える人がほとんどいないにも拘わらず、標準語が想定され、各人が少しずつ違った言語を使用している、意志の疎通がなされ、各人の差異は許容されている事情と似ている。このようなアナロギーが許されるとすれば、各人がよりどころにしている標準的な文化の存在を想定することも決して誤りとは言えないであろうし、文化と文化の差異によって生じる文化摩擦を想定することも誤りではないといえよう。

2 カルチャー・ショック

ある文化の中で育てば、多少の差異はあっても、態度、行動、思考はおろか、感情の表出、認知までもがその文化の影響を受ける。子どもは、その中で自分が育った文化を受け入れ、それを内面化して成長する。八歳から九歳でこの文化の内面化はかなりの程度終了しているのは、これらの年齢で外国に連れてこられると、かなり心理的抵抗があって、異文化になじめないことから分かる。小さい子供ほど、外国での適応が高い。ある文化を内面化し、社会化するプロセスが終わった高学年の生徒や大人たちが、異文化の中に入り込むのに苦労し、アイデンティティーの葛藤を感じるのはこのためである。逆に言えば、低学年の生徒は、まだアイデンティティーと言えるものがそれほど確立しておらず、そのためにかえって新しい環境での順応性が高いとも言える。異文化と対峙した時に、認識面や感情面での理解困難さを感じる体験は、カルチャー・ショックと呼ばれている。ホールはそれを「個人が自分の所で当面してきた沢山のなじみのある手がかりが、失われたり、歪められたりした上に、他のなじみのない手がかりにとって代わられることである」と定義している(大林 P.289)。このカルチャー・

ショックは、誰にでも起こり得るし、それを感じたとき、良い方向でそれを受け止めることができるためには、このカルチャー・ショックのプロセスを正しく認識しておくことが必要である。

オバークはカルチャー・ショックのプロセスを次のように分類した。孵化期(魅力期)、移行期(敵意期)、学習期(適応期)、受容期(二分化併立期)(大林, p.283)。しかしこれがオバークの言うように、直線的に進むと言うよりも、何度もこれらのプロセスを繰り返していく内に、その質と深みが変わっていくと考えた方がよいであろう。

3 文化摩擦

文化摩擦は、先ほど見たようなカルチャー・ショックを経験する内に、相手文化に対する固定的な見方ができあがって、それを特殊に個人的なものを受け取るよりも、文化一般の差異と受け取ることから出てくる摩擦である。しかも、その考え方に往々にして、文化の優劣性といった、非文化的な要素も入ってくることが多い。相手の文化を自分たちのそれと比較して、優れており、模倣すべきだと考えるのと、劣っており、取り入れる価値がないと考えているのでは、当事者の受け取り方はまるで違ったものとなるであろう。相手国の文化を価値のないものと最初から考えると、カルチャー・ショックを感じる必要性がないかも知れない。何年も何十年も外国に暮らしていないながら、その言葉をマスターする必要性を感じずに、自分の言葉を話してくれる人を周囲に集めて、文化的ゲットーの中に生活している「外人」はこれに当たるかも知れない。これらの人は「害人」と呼ばれないかと危惧しているのだが、このことにはこれ以上触れないことにする。

5 認知・感情・行動の三位一体の必要性

私たちを取り巻いている文化による規制、ルールは、必ずしも、目に見える形で表れるとは限らない。ニュースなどで、ある国の出来事を知っていたり、食事の仕方や住まいなど、目で見えるものを知っていても、その国を知ったことにはならない。その国の人が、物事に対して、どのような価値観を抱き、どのような考え方をし

いるか、どのような世界観、人生観、審美観を持っているかを知るとも、重要なのである。しかもそれらはたいてい明示されないで、気付くことも困難で、自分が誤りを犯したことに気付かない可能性がある。私たちの何気ない感情の表出さえも、文化に規定されているという事実は恐ろしいものである。パオズインガーはこのことについて、次のように書いている。

「いわゆる基本的な感情表出さえ文化に影響を受けている。この関連を知ることがいかに大切かは、次のような誤解が生じることからも分かる。例えば、騒がしく、あからさまな感情の表出は、ドイツ人からすれば、ややもすると、芝居がかった仰々しさと受け取られ、軽蔑の対象になるし、逆に、文化的な規範によって教養された、感情の抑制は、冷淡さと解釈されてしまうのである」(Bausinger, P. 42)。

しかも、感情だけでなく、行動様式、考え方すら、文化が関わってきている。それらをふまえた上で、言語的表現がなされる訳であって、言語がそれ自体独立している訳ではない。一つ一つの場面、場面で、どのように振舞い、どのように言語表現し、どのように感情表出すべきかは、文化によって決まっている。場面場面での、認知・行動・感情の三位一体は、使用する言語で決まっている。

どの程度、自己開示するか、つまり自己のプライバシーに所属する範囲の開示度はバーランドによれば文化によって違うことが指摘されている(Barnlund, P. 47)。彼の『日本人の表現構造』によれば、日米の大学生の比較において、自己開示度が高いのはアメリカ人の方であり、低いのは日本人の方だとされる。このようなアメリカ人と日本人が対話すると、日本人はアメリカ人をなれなれしい奴と思うだろうし、逆にアメリカ人は日本人をよそよそしい奴と思うであろう。

コミュニケーションはこのように、複数のチャンネルで行われ、言語のレベルだけで行われている訳ではない。ある事柄について会話しながら、同時に相手の人物を評価することは、私たちが無意識に行っていることである。

いくら表面的に会話がはずんでいても、双方が相手をネガティブに評価すれば、よい人間関係は確立できないであろう。

5 具体的な例

このようにすべての行動、振る舞い、考え方、容貌、身体、服装などに、価値観や世界観がつきまとう。肥満が価値あるとされる国や時代があつた一方、肥満を軽蔑すべき状態と考へ、過度なダイエットに走らせるのも、このような価値観がさせる技である。風邪を引いたにもかかわらず、必死の覚悟で授業に出席したところ、アメリカ人の教授から叱られたという、興味深い留学の体験談を、口羽益生は述べている(山口・齋藤 P. 27)。ウィルスを教室にまき散らすというのが、この教授の見解だという。最初はそれを人種偏見だと思ったと書いている。筆者の友人の国際結婚の例だが、日本人妻が病気になる、栄養のあるものを食べさせて、早く元気になって欲しいと考へて、脂ぎった料理を甲斐甲斐しく作る夫と、この夫が病気になった時に、消化力が落ちているから、消化の良いお粥を作つた妻との間に、意志の疎通は困難に思われる。食生活においても、鈴木が書いているように(鈴木 P. 142)、日本の旅館において、客の注文を一切聞かずに、食事が用意され、すべて食べることを必ずしも期待されているとは思えないほどの料理の量が出るのは、当たり前になっているが、客の食欲、嗜好、宗教には無頓着に運ばれるこれらの食事は、文化摩擦を引き起こすかも知れない。

動物愛護なども、なにか質的な差が文化の間に横たわっていると思えてならない。自分が国を去るに当たって、もはや飼育できないという理由で、これまで飼っていた猫を始末するのが、動物愛護と考へるのか、野良猫となつて自分で生きて行つて欲しいと思ひ、他の人に拾われることを期待して、捨て猫するのと、どちらが果たして動物愛護と言えるだろうか。後者は日本人の「優しさ」だろうか、それは必ずしも世界に通じる優しさではあるまい。最近ヨーロッパでは牛を屠殺場に運搬するに当たって、動物虐待的な行為に対して、非難が集中、一定の時

間が経過する度に休息時間や餌や水が与えられ、しかる後に、屠殺場へ連れて行かなければならないとの報道があったが、上の猫の話に何か似ている感じがする。また同様に、日本では、魚に関して、活け作りを喜び、踊り食いをする人もいるが、他の文化圏の人にそれはどのように映っているのだろうか。ドイツでは、生きているニジマスを買うと、魚屋は、まず電気ショックによって魚を麻痺させ、しかる後に、ナイフを入れて内臓を取り出す光景に出会すが、ここにも動物は食しても良いが、苦痛を与えてはならないという考えが根底にある。日本人は、ドイツの考えからすれば全員動物虐待で刑務所行きとなるかも知れない。

お金に関しても様々な文化の態度がある。使い方、貯蓄観、割り勘、チップなど、ルールを知らなければ、文化摩擦を引き起こしかねない。例えば、割り勘勘定するという行為自体が、人間関係をその場で精算させ、非常にドライで冷たいと感じる韓国人と、相手に負担をかけさせたくないし、また相手からの負債を背負い込みたくないで割り勘を好む日本人はどのように折り合いをつけるのであろうか。

他人から招待された時、イギリスでは、断れるのは先約がある場合だけであると、ニューストブニーは書いている(2017)。日本では、相手を傷つけまいと曖昧な返事をするのも許される。イギリス人と日本人は交際できるのであろうか。

外国の人をホーム・ステイさせる日本の家庭も最近多くなっているが、相手に部屋を貸しているだけという、ヨーロッパでは当たり前前のドライな関係は、日本では希であろう。相手を家族の一員として、娘や息子のように入愛がり、逆にそのことが相手に心理的な負担をかけていたり、あるいはプライバシーの侵害になっていたりするかも知れない。日本人や韓国人の親切さは、相手に同様の思いやりや遠慮を期待し、相手がまたそのことを知っているから機能するのである。ところが、そのような関係を全く知らないで、そのような親切をして一方的に利用し続けると、いつかはこの関係は破綻するであろう。ホーム・ステイしている外国人が、突然

家を出てくれと言われ、今まであれほど親切だった日本人の豹変ぶりに困惑したケースが身近にあったが、これも日本の親切というものの誤解から来ている。その他、教育観、人間観、恋愛観、倫理、家族観、友人観、結婚観など、様々な事柄に同じようなことが言えるのである。相手の文化を知らなければ、とんでもない失敗を犯すことになる。

6 ものが果たして客観的に見れるか

異文化理解を困難にしている現因として、選択的知覚の問題がある。私たちはものを客観的に見ることはできない。ただ見ようとしているものを見ているに過ぎないのである。同じことは、「誰でも知っている事実だが、普通の人は事物をありのままに見るのではなく、ただ決まった型を見るだけだ」というヒュームの言葉に見て取れる(ハヤカワ P.190)。例えば西欧の日本の見方、その中にある、日本異質論を研究すると、日本に対するイメージは時代を超え、繰り返えされることが分かる。西欧の一方的な日本に対するイメージ、つまりジャポニズムの歴史は、西洋人の見方に一定の方向性をはめているのである。またそれを受けての日本人による日本人論そのものが、イデオロギー性を帯びており、いかに説得力があるように見えていても、やはり自ら西欧やアジアの見方を規定してしまっている。日本異質論は、両者から出されるが、意外にも日本の社会は西欧のそれに比して変わっている訳ではない。最近も、日本異質論に対して、大蔵省は反論している。海外からやり玉に挙げられている「日本の経営」について、「従業員をはじめとする利害関係者の共同的経営はドイツ、フランスでもこれに近い傾向がある」としている(読売新聞1995年7月28日)。それぞれの国が、それぞれの国に対して偏見を持っていることは、バレスの「偏見」などにも伺えるが、西欧列強に対抗できる力を持った経済大国日本に対しては、1989年以降、ソビエトの崩壊後、ますます厳しい見方がされるようになっていく。ウォルフレンの「日本権力の謎」や、「人間を幸福にしない日本というシステム」、ファローズの「日本封じ込め」、ハンチントンの「文明

の衝突」など、いわゆる「日本叩き」と呼ばれる一連の書籍が発行され、それがベストセラーになっているのは気がかりな現象である。もっともこれらの本には耳を傾けなければならない主張も数多くあることも書いておかなければ片手落ちというものであろう。

三 国際化とは

国際という言葉は、日本において、一種の呪術的な響きを持つていることは、海外からのお客が来そうもないホテルや、旅館に堂々と国際という名前が付いていることから分かる。最近は大学や学部にもこの手の国際という名前を付けたのがやたらに多いが、名前を付けることで、急に国際的になる訳でもあるまいにとも思う。最近とみに国際化というものが声高に叫ばれているが、この国際化コンプレックスという現象をどのように理解したら良いのであろうか。

1 国際化という病理

世界第二の工業国、世界第三の貿易輸出国、世界第一の資本輸出国である日本で、国際化というものがテーマになることが病理の深さを語っている。

明治以降の日本と諸外国との接触はどうであったのか。日本は欧米諸国から、技術・知識・制度を導入し、急速に欧米諸国に追いつき追い越せと、がむしやらに突き進んできたが、果たして我が国は外国に対する理解を深めるように努力してきたのであろうか。

和魂洋才という日本の文化政策は、まさにその逆のものを目指してきたのではなからうか。この和魂洋才という文化政策は、必然的に日本を孤立化の道へと駆り立てたのではなかったか。表面的には欧化していても、精神の深いところでは日本のままでとどまろうとし、そしてこの「日本精神」をアジアの諸国に押しつけようとして

きたのではなかったらうか。そのためにアジアで真の友人を持っていない国になってしまったのではなからうか。日本は経済的には「西側」に属しており、G7のメンバーでもある。そのために日本人が意識しようとするまいと、日本はアジアの一員とは見られないことになる。日本人は東南アジアの人々からよくバナナと描写される。表面は黄色であるのに、皮をむけば中は白という訳である。つまり日本は欧米諸国からはメンバーとは見なされず、またアジアからもメンバーとは見なされないことになる。

1980年代になって国際化が声高に叫ばれ出した。なぜ国際化が叫ばれたのであろうか。これにはそれなりの日本側の必然性があったと思われる。一つは日本の経済がアメリカを脅かすものとなり、日本異質論が世界で再び声高に呼ばれるようになったこと。それに対して、日本を世界の一員として位置づけ、日本を普通の国にしようとする努力が国際化であろう。かくして日本の市町村に国際交流員が置かれるようになった。もともと日本の経済力が必然的に、外国との交渉を増大させたことも、また外国人の数が日本社会に増えたこともその要因である。日本の経済力の増大にともなうて、接触が増大し、文化摩擦が本格的に始まり、日本異質論という外圧を受けて、日本を普通の国にしようとする要請が、国際化の正体である。これまでが異常だったことを白状したのである。

2 国際交流

日本のこれまでの国際交流はどうであったのか。エキゾチズムに訴えた、伝統文化の紹介は確かに、珍しさもあって、人気を博すことは疑いはないが、日本の現実を伝えるのに果たして寄与するのだろうか。また海外旅行者の増大や、外国で働く日本人の数や、日本で働く外国人の数だけの問題でもない。海外旅行の増大が、必ずしもその国の理解を深めるのに寄与するとは限らない。一流ホテルに泊まって、観光バスに乗って、日本語のガイド付きで、いわゆる観光地を足早に駆けめぐり、写真を撮って、おみやげをどっさり買い漁っても、国際交流

が行われたことにはならないし、経済格差を、現地の人に味わせただけでも知れない。旅行者は、ガイドブックなどで、何を見、何を知るかの方向性があらかじめ決定され、最初から期待していたものを手に入れようと旅行している。したがって、旅行によって、相手の国を理解できるといふよりも、あらかじめその国に対して抱いていた偏見を確認し、その固定化に終わったりするのはなからうか。

日本人労働者の海外転出や外国人労働者の日本への流入に関しても、これを国際化の観点から手放しで喜べる状況にはない。前者にあつては、経済進出にとまなう、現地での特権階級的な生活。現地人との接触を断つ、日本人ゲッターや日本人クラブでの日本人同士での付き合い。エコノミック・アニマルという言葉で言われるように、経済分野に限つての現地の人との接触。現地の言葉や習慣を学び、あるいは取り入れようとしない姿勢。後者にあつては、日本人学校と不法就労と怪しげな研修プログラム。相手国の文化を知る息の長いプログラムを国や地方自治体は用意しなければならない。

3 日本はなぜ国際化に苦しむのか

先に国際化が叫ばれることが病理だと書いた。今になって国際化を促進しようとすること自体が奇妙に聞こえることと、その国際化に日本が苦しんでいるように見えるから病理と書いたのである。いろいろとその原因はあるが、国際化のデータを見るまでもなく、日本にはまだ外国人を受け入れるシステムが十分に整備されていないように思われる。システムとここで書いたのは、単に制度上の問題ではなく、心理的、政治的、社会的な問題を考えているからである。日本と、周辺諸国の経済格差などは、簡単に解決できる問題ではないにしても、国際化というようなきれい事やスローガンで済む訳ではない。

難民の受け入れの否定の問題を考えてみても、経済大国としての義務を果たしておらず、国際社会の一員といふ自覚が欠如していると言わざるを得ない。ベトナムからのポート・ピープルを、人種も文化も違っているドイ

ツが、五万人も受け入れたのに、日本は殆ど受け入れなかったことや、経済的に統一の負担を強いられているドイツが、さらに三十万人の、ボスニア・ヘルツゴビナからの難民を受け入れているのを見るにつけ、日本の国際感覚の欠如をますます感ずるのである。まずもって自己愛から脱却しなければならぬ。

日本には果たして多文化共生の理念があるのだろうか。日本の植民地経営に見られたように、日本には文化の同化政策しかなかったのではなからうか。多文化共生という考え方が存在しないがゆえに、血統主義、父権主義がまかり通るのである。日本は本当に外国人に対して寛大な国なのか大いに疑問がある。外国人に対する特別扱いと蔑視というのはコインの両側であると思われる。西洋コンプレックス、白人崇拜、外人天国とアジア人への無関心は同じ根から出てきている。ともに自分たちと同じ義務と権利を持った、対等のパートナーとして受け入れようとする意識がそこにはない。外国人を市民として受け入れることが、心理的にも制度的にもできなければ、国際化も単なるスローガンに終わるであろう。外国人の市民権、選挙権、年金、職業の機会均等、同一労働に対する同一賃金などを早く確立し、外国人を受け入れるシステムを用意しないで、ただ日本を世界に開くという形で、外国人を受け入れると、国際化のスローガンが、新ナショナリズムを生み出すことにもなりかねない。

国際化とは、このように考えると、自分の心にある差別、偏見、憎悪を取り除き、同化強制でもない、真の共生を目指すことである。このような意識を醸成し、教育を行わなければ、日本は今後も国際化に苦しむことになるであろう。

四 言語・文化・社会

コミュニケーション能力があるとかないとかという場合、英語ができるかできないかと同義語のようにとらえられていることが多い。英語ができないからコミュニケーションができない、というのも半ば当たっている。な

ぜ日本人の英語能力は、TOEFLの国別平均点で、世界二百十四カ国中下から十七位の成績であろうか。日本人は決して努力をしていない訳ではない。英語にかける努力と時間とお金は大変なものである。筆者が問題にしたいのは、このことと、英語がある程度できても、コミュニケーション能力ができていない事例が多いのはどうしてかということである。このことを考える時に、ネウストプニーの次の言葉が思い出される。

「英語ができないから、コミュニケーションできない」というのは、俗説である。私はこの俗説をうら返して、「コミュニケーションできないから英語ができない」という理論を提唱したいと思う。(P. 40-41)。

1 日本人の言語態度

外国人とコミュニケーションできないのは、何か日本人の言語態度に問題があると言わざるを得ない。日本語がまだ日本人のレベルに達しているとは思えない、外国人留学生と、日本人学生と一緒に授業を行っている、発言の方向のイニシアティブは、言葉のハンディを背負っているはずの留学生の方が握ることが、山口大学から報告されている。「討論となると、日本人学生は途端に生彩を失う」(佐々木 P. 231-232)。日本人の社会が、グループ・メンタリティを強制しており、相手の意見に同調しつつ、自分の意見を開陳し、自分からイニシアティブを取り難くさせているからだとの指摘を高山ハウィヒターが行っている(P. 115)。つまり言語によってコミットしていくやり方に、精通する機会を日本人は余り多く持っていないのである。これが文化の産物であることは、日系社会が残っている、ハワイの日系アメリカ人学生の失語症が三代まで続いているという指摘からも分かる(池上 P. 187-188)。言語の使い手のプロであるはずの日本人記者についても似たような事例がドイツから報告されている。日独の記者のフォーラムでの観察によると、フリー・デイスカッションに日本人記者は弱く、相反する意見を述べるのが苦手だとのドイツ側からの報告がある(ニーマン P. 5)。話題を提供せずに受け身にまわる日本人。言葉を避けるために、カラオケ・パーティ。食事に、豪華なお土産。これでは日本人の顔は見えてこないのではあ

る。日本人の表面的な話にはついていけない外国人留學生の嘆きも報告されている(大橋 P.118-120)。

2 言語観と文化

言語行動様式は場面に制約され、社会文化的に条件づけられている。オクスールによれば、言語の習得とは「発音、文法および語彙の獲得以上のものを普通含んでいる。習得される新しい行動様式とは、場面に制約されるものであり、伝達の言語の能力に属すると考えられるものである」(P.79)。このことを説明するために、文体や語彙を考えてみよう。語彙や文体などの言語の使い方で、その言語の使い手が、ある集団に帰属していることが分かる(P.139)。つまり、その人の階層、教育水準などが明らかになる。このように考えてみると、外国人はたどたどしく言語を使用している限り、寛容性や許容性を相手から期待できるかも知れないが、ある程度言語を話せるようになる、言語も、言語外のシグナルも、正しく送ることが要求される。もしこれらすべてのことがマッチしなければ、コミュニケーションが正しく行われたとは言えない。言語は文化社会的価値体系を持っているからである。

さらに、言語的手段で、意見の違いを調整し、あるいは調整不可能なことをお互いに確認しようとする仕方が、文化圏によって違う。言語に頼る度合いが大きい文化を低文脈文化、逆に、あうんの呼吸で調整する文化を高文脈文化との区別をホールは導入している。低文脈文化は人間関係に頼ることが多い。最も高文脈文化は、日本であり、その逆に最も低文脈文化はドイツ語圏であるとの指摘がある(本名 P.11)。日本人の言語の依存度が一番低いかどうかはともかくとして、日本人の口数が少ないことの報告は16世紀、17世紀のイエズス会の日本報告にも見いだされる(松田 1 P.287-288)。また、日本の成人の一日の会話量は3時間31分なのに反して、アメリカ人の会話量は一日6時間43分とのイシイ氏らの調査もある(古田 1 P.90)。話す文化と話さない文化を持つ人が出会うと、どのようなになるだろうか。不言実行、口は災いの元をモットーに、根回しと非言語的理解によって調整を図っ

てきた、日本型スタイルは、企業の海外進出に際してのマネージメントにマイナスの影響を及ぼしていないだろうか。

3 デイベート能力と異文化理解能力

事情がこれまで見てきたとおりなら、日本人がデイベート下手なものも頷ける。北岡が指摘するように、日本人がデイベート下手なのは、決して外国語のせいではない(北岡 P. 3)。アメリカにいる日本人商社マンは英語ができるにもかかわらず、討論ができないのは、むしろ日本人の日本語による表現能力の問題である(北岡 P. 15)。日本人の対話は、相手と意見を摺り合わせ、相手の立場に立って行おうとする。しかし、自己主張をせず、相手に謙譲する姿勢は、不誠実、悪徳ととらえられかねない(ピーターセン P. 45)。自己主張の激しい文化圏に属する人たちの会話では百の主張でも百三十位の主張をする。相手方もよくしたもので、百三十の主張をしている時は、そこから三十を割り引いて聞いている。したがってどちらも過不足がなく、会話が行われている。謙遜し、謙讓の美德があるとされる文化圏では、百の主張があっても七十程度しかしない。この文化圏では、従って相手が七十程度の主張をした時には、相手に三十ポイント加算することでやはりうまく機能することになる。前者の文化に属するAと、後者の文化圏に属するBとが互いに意見を交換する時はどのようになるのだろうか。AはBを非常に弱々しい、無能な人間と見てしまうかも知れない。逆にBはAを生意気で、協調性のない騒がしい奴と判断するかも知れない。

河合は「言語によって事象を明確に意識化する」(P. 6)行為は、日本の良さを破壊するかも知れないジレンマを指摘しているが、日本の協調型文化は、違った考えを許容しない排除の文化でもあることを知るべきである。謙遜は、相手にも同じことを要求しているのであって、日本人は意見の対立や違いを許容し、懐の深い文化を持っている訳ではない。日本に必要なのは、このような言語態度を変更することではなからうか。諸外国から、日本

の民主主義は未発達だと言われたり、日本は民主主義国ではないと言われたりするのは、一つには、透明性を欠いた日本の言語態度が原因であろう。

上のように考えてみると、ディベート能力とは、ただ単に相手を論理的に打ち負かすとかいうレベルではなくて、自我の確立を含む、非常に文化的な能力であることが分かる。相手国の文化システムに、過不足なく対応できるには、言語のレベルだけではなく、もつと広範囲な文化のレベルでも対応できなければならない。外国語教育においても、90年代には、異文化対応能力をつける教育法が高く評価されるようになった(Bolten, P. 269)。

五 非言語行動

先に述べたように、コミュニケーションは言語によつてのみ行つてゐる訳ではない。非言語コミュニケーションによつても行われている。非言語コミュニケーションとは何か。マルティン・ラングは1996年春の日本独文学会において、それを次のように定義している。非言語コミュニケーションとは「ジェスチャー、言語に付随する音、肉体の動き、コミュニケーションのスタイル、あるいはこれらの存在しないもの」。私たちは言語だけでコミュニケーションをしている訳ではない。例えば、言葉であることを主張していても、眼が反対のことを言っていることもある。眼は口ほどにものを言うのである。また、会話をしている時、時計ばかりちらちら見ているは、この人は会話に関心がないことが解る。また相手と全く会話する意志がないことを、例えば背中を向けることで表すことができる。このように会話によるコミュニケーションをしなくとも、相手に何らかのシグナルを送っている訳で、やはりコミュニケーションは行われていると見るべきである。このように、コミュニケーションはその人の意図とは関係なく行われるし、人はコミュニケーション無しで済ますことはできないのである。

大半のコミュニケーションはボディ・ランゲージで行われていると考えられる。言葉の運ぶメッセージの量

は全体の7%、55%はボディ・ランゲージ、38%は音調表現で伝達されたとされる(小林 P. 93)。非言語コミュニケーションは、相手の仕草、表情などのボディ・ランゲージだけでなく、服装、化粧、色彩、香りなども入ってくる。私たちは常に、このようなものの中に何らかの意味を読みとろうとしている。この作業は、不可避的に行われる。コミュニケーションの問題は、相手にうまく伝えようとする技術の問題とは別に、むしろ伝えるつもりもない意味や、伝えたくない情報を、周囲の人が勝手に読みとってしまう、コミュニケーションの過剰性が問題になる(野村 P. 28)。つまり、本人の意識しないところで行われるから怖いのである。これが異文化コミュニケーションの場では、もっと複雑なものになる。

国際的な討論会議で、日本人がよくするように、視線を逸らしたり、胸の前で腕を組み、それを机の前に乗せて、前のめりに寄りかかる姿勢ではまともに相手にされない(北岡 P. 14)。

次に、非言語コミュニケーションが実際にどのように使われているかを分類して見てみたい。

1 空間の非言語コミュニケーション

話者が互いにどのような距離を取るか、どのような位置関係に座るかは、双方の親密度、性差などによって違ってくる。またこれに文化差が加わると一層複雑ものとなる。日本とアメリカを比較すると、日本人の恋人同士の距離は、見知らぬ同士のアメリカ人の距離と同じである。日本人とアメリカ人が相互に会話するとどのようなだろうか。aggressiveはラテン語のagredi(近寄る)から来ているが、相手との距離が近づきすぎると、日本人は相手をaggressiveと受け取るかも知れないし、アメリカ人の方は、日本人の話相手が、よそよそしく、会話の参加意志が希薄だと思いかも知れない。

2 時間の非言語コミュニケーション

会話交代の間の沈黙の長さ、会話を続行する時の次の話を考える長さの許容範囲も、会話交代のスピードも、

聞き役に回る時間の長さも文化によってまちまちである。話の隙間の長い国民は、そうでない国民から話を中断させられる危険性がある。話の途中に、割り込んで、別のテーマに移ったり、前の話に戻ったりする頻度が、ドイツ人の会話分析をすると非常に多い。日本人とドイツ人が会話して、ドイツ人から絶えず中断されると、日本人は相手を礼儀知らずの無礼な奴だと思いかも知れない。

3 超言語

これは言語に付随していくるもので、リズム(rhythm)や高さ(pitch)や調子(tone)や速度(speed)などがこれに当たる。同じ文章でありながら、皮肉や、反語、脅迫、愛情表現になったりする。これらにも精通しなければ、誤解されることは必至であろう。

4 身体と態度のボディ・ランゲージ

動作記号体系(kinesics)がこれである。例えば挨拶行動は、言葉だけではなく、一定の行動が伴う。ドイツ人は握手の手を出すのに反して、イギリス人は余り出したがらない。また、日本のように、相手志向の文化では常に相手に同意のシグナルを与える必要がある。そのために頷かなければならない。ただし欧米でも会話が一方的な場合は頷くという指摘もある(小林 P.133)。日本のテレビでは同意シグナルを相手に出すための「頷き要員」としか思えないような話し相手を、それも若い女性が多いのだが、配置している。

視線でも、日本人は眼をそらす傾向が窺える。日本には相手を見据える文化は存在しない。はにかみもこれと同一のレベルであろう。しかし、相手を見据える文化の者から見れば、日本人の態度は、心に疚しいことがあるのではないかと映るかも知れない。

接触度合いと、接触部位も文化によって大きい差があることは、バールランドの日米の大学生の比較で明らかである(P.127)。これによれば、日本人は恋人同士での接触の度合いと、アメリカでは父親の身体に、大学生の息

子や娘が接触する度合いが同じだとされる。

六 文化と言語行動

これまで文化と非言語コミュニケーションの関係を見てきた。しかし言語行動そのものが、やはり文化によってかなり大きな差異があることは否めない。日本人は自らの言語行動をどのように感じているのだろうか。金田一は『日本人の言語表現』で、日本人の言語生活の特色として、第一に話さないこと、書かないことを良しとする精神があり、日本人は自分の意見を出すことを控える傾向があり、相手の意見に賛成し、その言葉をなぞることを喜び、断定的な物言いを避けようし、間接的な表現を好む。その結果、意味のはっきりしない文章・談話にもなれているのだと言う。

竹内は「私たち日本人は、話しかけることによって自分の意志や希望を他者に知ってもらうことよりも、向こうから察してほしい、と期待する姿勢が根強い」と書いている(P. 42)。

鈴木は、日本人が国際会議などで見劣りするのには、「語学そのものよりも、むしろ問題は、自分の気持ちを言葉で充分表現する意志の弱さ、しかも相手の主張や気持ちとは一応独立して、少なくとも今の所自分はこう考へる」という自己主張の弱さにあるように思えてならない」と書いている(鈴木 2 P. 253)。以上は日本人が自らの言語行動について書いたものであるが、次に外国人から見て、日本人の言語行動はどのような見えるのかを少し引用すると、日本でドイツ語を教えていた、エーラーズは「ドイツ人から見たら日本人は表現の下手な人種に写っている」と書いている(Eilers 2 P. 164)。ホールは「世界の中で最も低コンテキストに位置する(明示的なコミュニケーション)のがドイツ人で、スカンジナビア人、アメリカ人がこれに続きます。一方、高コンテキスト(非明示的コミュニケーションをする)のグループには、アラビア人、中国人、日本人などがいて、その中で最も高コ

ンテキストに位置するのが実は日本人なのです」と書いている(可兒 P. 28)。ホルンショイアーによれば、ヨーロッパの討論文体と日本の討論文体は対極にあるとしている(P. 28)。これらの日本人と外国人の双方とも日本人の言語行動の特異性を指摘している。この日本人の言語行動の特異性は次のような点である。

1 自己主張のなさ

筆者はかつて、日本語とドイツ語を比較したことがあるが、言語行動において、かなりの違いが見られた。日本人の討論は連歌方式になっている。つまり、前の人の発言を受けて、それに真っ向から反対しないで、それに摺り合わせながら、自分の考えを述べる傾向が強い。調和文化と対立文化、すなわち「ボーリング型」と「テニス型」の理論はかみ合いそうにもない。「ボーリング型」の会話では、同席しない人の批判や陰口になり、全員が同じ方向に話が進むのに反して、「テニス型」では相手の弱点を攻めることに全力が注がれるのである。

このようなコンセンサスを要求する社会は、論点の不一致は人格の不一致と取られかねない。またそのように思われるのを避けたいばかりに、論点をはぐらかし、妥協を図ろうとする。また例え自己主張を行っても、矛先は自ずと鈍ることになる。従って日本では真っ向から対立する形の論争は希であり、好まれないのである。

2 謙遜

「私の如き浅学非才の田舎者が、皆様方のようなお歴々の前で、高いところからお話しすることは僭越至極でございますが」とか、「私の限られた知識や経験をもとにした話など、この分野に深い学識経験をお持ちの皆様方には、なんのお役にも立たないと思われませんが」とか、「専門家の皆様方を前にして、私のようなズブの素人がお話しできることはありませんが、主催者のたっのご希望によりまして」などと言ってから、話を始めることになるが、これなどは下手をすると、講演者の能力も疑われかねない(謙遜の例は可兒から)。謙遜が機能するのは、謙遜が文化的に高く評価されるところだけだと知るべきである。

3 断定を避ける

曖昧さは日本語の特徴でもある。江戸時代にフロイスは「ヨーロッパでは、言葉において明瞭さが求められ、曖昧さは避けられる。日本では曖昧なのが一番良い言葉であり、最も重んぜられる」(松田・ヨリッセン P. 138)と書いている。

4 相手の立場の尊重

事実はこうだという断定することすら相手を傷つける可能性がある。従って、「(…)と思われる節がある」とか「(…)と言う者がいる」とか「(…)こちらは田中ですけれども」などと語気を和らげる語法が発達している。また相手に逃げ道を残しておくのも同じような気持ちから出てきている。また日本人はなるべくなら直接に断らないで、返事を曖昧にしておくことを好む。

5 感謝と陳謝

日本人は外国語においても陳謝に関する用語を多用することがクルマースによって指摘されている(P. 89)。「失礼します」、「お手数ですが」、「ご厄介ですが」、「ご面倒ですが」、「いろいろお世話になっています」など、感謝や陳謝をよく使うが、外国語に翻訳するのは困難である。また、感謝するところで、陳謝する現象もよく見られる。日本語において「昨日はどうも」の大切さをネウストプニーは書いている(P. 88)。友だちに家に招待された翌日に、その同じ友だちに出会えば、「昨日はどうも」という感謝の言葉を使うことが大切であり、また相手からその言葉を使うことが期待されるのである。

6 自己の責任

かつて中国からの留学生であった彭は、日本語を観察し、相手に負担をかけさせまいという態度から、日本人は自動詞文を他動詞文にして表現していることを指摘している。

「うちの子は熱を出して、学校に行けない(彭 1 P.130)」。

「すみませんが、ご壊してしまいました(彭 1 P.131)」。

今度は逆に、自分が相手にしてやったことを、相手の負担にならないように、他動詞文を自動詞文で表現する現象を指摘している。

「お茶が入っています」。

「お風呂がわいています」。

「見つかりました」(彭 1 P.131)。

このことは、日本語は相手の立場で話されることの好例であろう。

7 根拠付けの無さ

日本人は意見を言い放して、相手を傷つけまいとの気持ちから、「(…)と思う」などのような、単なる信仰告白形式が多く、反対意見でも、その根拠付けを強く行わない。そのために反対意見でもあまり強く響かない。

西欧では根拠付けのない主張は、単なる自己の思い入れとして、まじめに受け取ってくれない。日頃から日本語でも根拠付けをする訓練をしておかなければならないだろう。

七 文化と沈黙

1 沈黙の重要性

沈黙というのは欧米では高く評価されていないように思える。アーサー王伝説の一つ『パルツイヴァル(1200頃)』(ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの作品)に、沈黙について興味深い指摘がある。騎士生活にあこがれたパルツイヴァルは、聖杯王アンフォルタスに会う。王は彼をもてなし、聖杯から山海の珍味があふれ出

る。しかしこの聖杯王の顔には、苦悩の色がみながっている。王は神罰によって重い病気にかかっている。この病気は、選ばれた騎士によって、その聖杯の由来と、病気の原因を尋ねられたときに、治ることになっていた。かねて、寡黙の美德を教えられているバルツイヴァルは、全く質問しなかった。翌日目が覚めると、城の中には全く人影がなかった。

この話はまるで日本人のことを言っているようだ。日本人はさしずめまだ許しを得ないバルツイヴァルの心境であろうか。

会話というのは表現されたことと、表現されていないことから成り立っている。沈黙は、会話の不在ではなくて、別の会話手段である。沈黙状態があっても、会話は連続していると見なすべきである。これまで沈黙は、会話の重要な要素として省みられることはなかった。しかし、言語学の分野でも、会話と沈黙は補完的な関係になつていると認識された(Jaworski, P. 48)。

例えば、部屋の中でたばこを吸われるのが嫌だということを手に分からせるために、言語に訴えるのと、何も言わないで、窓を開けるとどちらが効果的であろうか。このことから沈黙の持つ力が理解できようというものである。

通常の会話において、言語的手段と非言語的手段と沈黙とが組み合わされる。非言語手段のところで説明したように、人間は、会話してしようと、してまいと、常にシグナルを送っているのである。沈黙は口に出して言わない分、その解釈が一義的ではないので、コミュニケーションのギャップを引き起こしかねない。沈黙を正しく理解することは会話には不可避である。

2 文化と沈黙

西洋文化では沈黙は恐れられ、相互関係の欠如の表明と受け取られるので、話し続けることになる(Jaworski,

「D」。日本人はこのような沈黙に耐えることができるので、普通は無視する。言語を選び取れば、沈黙のルールも選び取ることになる。

会話が続けていることを示すためにいろんな言語手段がある。繰り返しや、穴埋めの言葉 (gambit) が数多く使われる。外国語を習う時、そのような穴埋めの言葉も練習して、不用意な沈黙の出現を阻止する必要がある。外国語教育において、これまで穴埋めの言葉に余り多くの注意が払われなかった。

3 沈黙の種類

どういう時に沈黙しなければならないか、あるいは言葉に出さなければならないかは社会・文化的に規定されている。どのような時に、黙るのか、また沈黙について、ウォルスキーの分類を借用すると次のようになる。

a 沈黙そのものの発生が期待される所での沈黙

文章と文章の間の沈黙がこれである。しかしこの沈黙の長さも文化によって違うので、沈黙の長さの短い文化の人に言葉を取られてしまう危険性がある。ポーズの長さが長い人と、短い人とは、その人間の評価さえ変わる。沈黙を一方は会話の意志のないことと受け取り、他方は会話の継続と受け取るかも知れない。

b 沈黙そのものが相手へのメッセージとなっているもの

沈黙による会話。これは言葉の矛盾かもしれないが、まさに言葉が期待されているところで、沈黙が登場すると、その沈黙は大きな意味を持つことになる。それに反して、前の例では、沈黙を期待されている場面なので、沈黙にそれほど大きな意味が与えられない。発言に重みをつけるために、わざと長い沈黙を入れたヒトラーの演説の例などがこれである。またさらに、沈黙は、断絶、絶交の強い意志を表示したり、敵意の表明であったりする。あるいは、例えば末期のガン患者が医者に真実を問う時、医者はその問いを黙殺するような例に見られるように、狼狽を隠したりすることもできる。このように、沈黙はいろいろな側面を持っている。

沈黙はまさに言葉に出さないうえに、二面性を持っている。怒りの表明は言葉で言うよりも、沈黙の手段を使った方が有効な場合がある。また沈黙して明示しなかったことで、関係修復の可能も残しており、関係の決定的な悪化を避けているとも言える。

c 習慣化された沈黙

末期の患者を見舞うとき、別れに際してグッド・バイと言ってはいけない。逆にくしゃみした時、日本語では相手に何も言わないが、英語やドイツ語などでは相手の健康を祈らなければならない。このように、習慣化された沈黙、呪的な機能を持った沈黙は、その解釈が一義的であり、強く文化と結びついている。それを知らなければ、失敗する危険性がそれだけ大きい。

4 沈黙は金なのか

沈黙の文化と言説の文化の対立によって業務提携がご破算になった例を草野は挙げている。それによると、日本のある会社とアメリカのある会社とが業務提携をすることになった。アメリカ人の交渉相手が要求を出すと、日本人の交渉相手はその要求を飲んだ。それではという訳で、アメリカ人は次々と要求を出してきたが、それも日本側は次々と飲んだ。最後に、要求それ自体はこれまでのものと比較して取るに足らないものであったが、アメリカ側が要求を出してきたとき、この日本の会社の社長は、アメリカの会社の社長に手紙を出した。そこには今まで交渉を成功させるべく、いかに「忍び難きを忍んできた」かが縷々と語られており、「両社の企業文化にこれほどの差があることが判明した以上、業務提携はもはやできない」と書かれていた。この手紙を見て慌てたアメリカの会社はすぐに最後の要求を取り下げたが、日本の会社の業務提携の打ち切りの意志は固く、提携はご破算になった。この最後の提案は最後の藁であった。それがどんなに軽かろうと、もう充分すぎる重荷を背負った船は、藁を乗せたことで沈んでしまうのである(P.18-20)。

沈黙はコミュニケーションにおいて重要な機能を果たしている。とりわけ高文脈文化においては、むしろ沈黙によるコミュニケーションが発達している。これは経済性の観点から言って有用であるが、しかしそこには安易性と危険性があることも知るべきである。日本の沈黙の文化は、それを前面に押し出すときに、独善性と危険性がある。とりわけ異文化コミュニケーションにおいてはこのことが当てはまる。暗黙の了解は文化を共有する場合は有効に機能するが、そうでなければ機能しない。沈黙は両義性を持っており、両刃の刃であり、誤解を招きやすい。また言語を省いているので、透明性が欠如しており、外部からは、不可解と写る。これが文化摩擦や貿易摩擦になる危険性をはらんでいる。

八 経済・法律・外交などにおける異文化コミュニケーション

異文化コミュニケーションの齟齬は個人の間だけではなく、経済・政治においても生じる。後者の方がその影響力を考えると重大と言える。

1 交渉スタイル

交渉スタイルは文化によって規定されることは、これまで何度か触れた。アメリカ人は最初「極めて強い態度で交渉に臨む」(藤倉 P. 137)のに日本人は相手と懇意になろうとする。アメリカ人はそれを時間の無駄だと考える(サリヴァン P. 278)。腹芸は通じない、アメリカ人にとっては「口に出して言われたこと、耳にはつきり聞こえたことだけが真実なのだ」(サリヴァン P. 383)。議論の対立した時に日米の処理の違いとしてサリヴァンは、日本は相手より高い立場で解決を図ろうとする。それに反し、アメリカ人は相手と平等な立場に立とうとする。たとえ意見の対立の解消がなくなっても、少なくともお互いに、意見の違いを確認できたことで、平等の関係を築けると考える(サリヴァン P. 93)。なるほどこれなら気まずくならない訳である。

2 実際的要素

摩擦を生むのは文化だけではない。摩擦のすべてが文化差で説明が付かない。異文化コミュニケーション論が逆にコミュニケーションを難しくしているくらいもあるが、むしろ政治・経済・制度・法律といった実際的な要素が大きな影響を与えている。

価格メカニズム、流通制度、系列、規制、人事慣行、教育水準、法観念の差などが実際的な摩擦の原因になることは容易に推測できる。新規に日本に参入しようとする外国の企業にとっては、このことは非関税障壁と写るのである。例えば、酒類販売業免許取扱要領1989年では場所的要件と需要調整上の要件によって、人口30万以上の都市においては、いろいろと規制があることがわかる。小規模の酒屋の保護を念頭に作られたこの法律によって、大型DS酒販店の進出を困難にしている。このような規制によって、日本の消費者は世界の平均二倍も高い消費者価格で物を買わされるのである。市場の地球化、世界統一工業規格、統一環境規格出現の現在において、1989年9月の日米構造協議の時のように、日本の特殊性を強調しているだけでは世界から叩かれるだけである。

一方、外国に進出する日本企業は、相手国では企業観、価値観、思考方法も違うことを自覚しなければならぬ。それぞれの国によって、企業管理、企業風土、人事慣行、意志決定のメカニズムが違うのである。

法観念の違いも摩擦の原因になる。日米の訴訟観はかなり相違している。日本はなるべくなら紛争は法的な手段以外で解決したいと考え、人間関係で調整しようとする。それに反して、アメリカは法に頼る社会である。日本には明確な権利の意識がなく、また権利を主張することが利己主義的な考え方だとされる。そのことから、日本人には「公民としての勇気が欠けている」と、「真の国際主義を確立するうえで明らかに障害になっている」との指摘がある(ウォルフレン 1 P. 424)。アメリカに訴訟が多い理由としては、訴訟するために収入印紙がいら

ないこと、成功報酬で弁護士を雇うことができるなどが考えられる。このようなトラブルを克服するためには、保険に入ったたり、顧問弁護士の援助を仰ぐべきであろう。

人事慣行に関しても、日本の人事慣行、学歴と良好な人間関係は、アメリカのビジネスには役立っていないという指摘もある(サリヴァン P.130)。製造業では割とうまく行っても、サービス部門、とりわけ銀行や商社では、アメリカ人をうまく使いこなしていないので、日本人社員の比率は45%もの高率に達している(サリヴァン P.128)。

製品の品質観の違い、工業水準、工業規格、環境基準、安全基準の違いなどもコミュニケーション齟齬の原因になることもある。欠陥品がある程度発生するのは仕方ないことで、購入者がそのような欠陥品を運悪く買った場合は、それを交換したり、修理すれば済むと思うのと、お客様は神様のように考え、できるだけ完璧な製品を世に送り出そうとするのとは、欠陥品が出たときの対応がかなり違うであろう。

3 文化的要因

宗教、風習、生活習慣などの考え方の違いから生ずるコミュニケーション摩擦。

1996年11月初頭にドイツのコール連邦宰相が来日した時の記者会見の模様を、ビルト紙は面白く伝えていく。記者クラブでのコール連邦宰相が演説することになっている壇上には、水道水の入ったグラスが置かれていて、これをめぐってトラブルがあったことが報道されている。ドイツ外務省はミネラル・ウォーターを要求した時に、日本の外務省は、日本は、水道の水が安心して飲める文明国だと主張し、相手方の反対にもかかわらず、壇上には水道水の入ったグラスが置かれたという。コール連邦宰相は結局それを飲むことになるのだが、もしこの報道が事実だとすると、文化による摩擦の一例として取り上げる価値があると思われる。ドイツでは水道水は普通、飲み物の範疇には入らない。低所得階層の人たちでは飲む人がいるかも知れないが、一般には飲まないとき

れている。飲めないほど金属汚染が進行しているというのがその理由である。そのような背景にあつては、水道水をお客に出すのは侮辱以外のなものでもない。筆者はうだつような真夏のある日に、ドレスデンのあるレストランで昼食を取っていた。いくらミネラル・ウォーターを飲んでも喉の乾きが癒やされないの、思いあまつて、とうとう水道水を注文した。その時のウエートレスの返事を今でも忘れることはできない。彼女は何と水道水は外国人労働者用なので、あなたには出せないと言ったのだ。翻つて、日本では何か水の良さを誇っているようなところが、発展途上国とは違つて、水道水が安心して飲めると考えている。地下水を主として水道源とするドイツと違つて、日本では地面を流れた川の水に塩素をぶち込んだ水を水道水にする。そんな水を良い水だと誇る感覚もおかしいと思うのだが、それには触れないでおく。かくして前述のような行き違いになる。どちらの態度が文化的に正しいのかの価値判断はひとまず措くとして、ただ、発行部数五百万部を誇るヨーロッパ最大の新聞に、日本はドイツ連邦宰相に水道水しか出さなかつたと大きな見出し語で報道されたことのマイナス面、つまり日本は宰相に一片の礼も示さなかつたとの印象をドイツ人読者にかき立てたことを考えると、水道水が飲めるのだと日本の外務省が言い張り、その意志を貫徹したことに、どれだけの利益があつたのだろうか。たかだか一本数百円のミネラル・ウォーターを請われるままに出していた方が、外交的に良かったことだけは確かである。

同じような文化の違いとしては、企業という組織の社会的役割というものがある。企業というものが単なる利潤の追求だけではなく、芸術・文化活動などにも力を注ぐことを期待されている風土の中で、利潤第一で生産活動や営業活動をしたらどうであろうか。また住民から積極的に地域活動やボランティア活動を期待されるところで、外国人だからといって、それらに一切参加しないとしたりどうであろうか。女性の社会的地位、男女機会均等、セクシャル・ハラスメントなどで躓く日本企業がやり玉に挙げられるのも、日本の感覚をそのまま相手国に持ち込むことから生じる。もつとも、何もかも相手に合わせる必要があるのかという、一見正当な反論もあるが、

多くの点で、同じ価値観を期待されることを知るべきである。自由、正義、公正、平等、男女機会均等、民主主義など。これらの価値観を欧米中心主義的だと排除しては日本は一層孤立するばかりである。

4 外交

外交スタイルの文化的違いは否定しがたい。外交といっても、国家と国家がぶつかるとはではなく、実際には人間と人間が折衝するのであって、文化的に影響された言語態度というか、交渉スタイルは出てくる。G7においては事務官を交えずに首脳だけが討論するサミット会議で、他の参加者をどれだけ魅了できる発言を、日本はこれまでしてきたであろうか。

1996年6月23日の濟州島における日韓首脳会談において、韓国の記者から、過去の反省についての意見を求められた時に、橋本総理は、まず個人的な話、例えば、終戦の時はまだ小学生であったとか、1965年の日韓条約締結後に、学生を連れて韓国に訪れて、日本の韓国史で習わなかった、創氏改名について知らされたとか、当時キム・ヨンサム氏に個人的に知り合ったことから話していた。この韓国人の記者に対する回答は、一番長く時間をかけて解答していたので、どのような回答をするのか期待していたのだが、本当に聞きたい部分は後回しにして、この前置きに時間がとられたのは、日本的と言えば言えるのだが、それだけに最後の謝罪の部分の主張が弱まったとの印象を与えたことは否めない。不思議なことに、日本の新聞には過去の謝罪を行ったことが報道されていた。このような言語行動は国際的には多用しない方がよいであろう。

アメリカは日本とは逆にその政策が鮮明である。アメリカでは大統領が議会に対して独立した力を持ち、拒否権を持つことから、相当な個人プレーの余地がある。そのために大統領を取り巻くブレインの考え方が強く出てくる。例えば反日の、修正主義者で日本異質論を展開する、アメリカの大統領経済諮問委員会のローラ・タイソン委員長(元カリフォルニア大学)、かつて米商務省で日本との貿易交渉を行った、クライド・プレストウィツ(米

経済戦略研究所所長)は、民主党クリントン大統領に多大の影響を与えている。日本は異質であるが故に、叩いてもよろしいという考え方がアメリカの言論界に定着した観がある。これはこれで危険性を持っていると言えよう。外務官僚中心な日本の外交も、日本を顔の見えない国にしているらしい。日本の外交官は、本省の指示を待っているのに、アメリカの外交官は日本の派閥の領袖とも太いパイプを持っており、交渉前提の現地での情報収集力の差が歴然としてしていると武田は指摘している(P.194)。一人の代議士が、税金で50人以上もの秘書を抱えて、情報収集に当たらせるアメリカの議員と、3人しか税金で雇えない日本の議員とが対等に対峙できないのは、能力の差というよりも、政治風土の差というべきであろう。

日本がサミットに参加できない会議があるとの高瀬の指摘は衝撃であった。それによると、1975年以来、サミットでは、「会議中かその前後に、公式の朝食会、ランチ、ディナーなどが催されるが、これ以外に非公式で、首脳だけが集まって、食事をとる機会が多い。ところが日本の首相だけは、この非公式の食事会には呼ばれていない」(P.71)。

また高瀬は日本のシエルパの不存在を指摘している。首相の在任中にサミットのメンバーの間の意見を調整するシエルパが本当の意味で日本に存在しないことは、日本に大変不利である。これは、大統領、首相の分身とも言うべき人物で、全面的な信頼を得て行動することになる。大統領、首相の任期中は変わることがない。役人でもなく、財界人でもない民間人が、選ばれるのが普通である。日本では、通常は日本の外務省の局長がこれに当たるのだが、局長の任期は通常一、二年で交代するので、人間関係を維持することが出来ない(P.72-73)。また日本のように首相が短期間のうちにころころ変わるのでは重きをなさず、サミットにおいても、一番端っこにお客さんとして座るに過ぎない。

日本の外交はこれまで、アメリカ追従型で、国際関係を日米関係を中心に見る傾向が強かった。これからはグ

ローバルに展開していかざるを得ない。日本が多価値を持つ普通の国であることをアピールすること、長所も短所も相手に知ってもらい、日本を積極的に宣伝することが必要であろう。また、前に触れたように、日本の政治土壤、組織、政策決定のメカニズムを国際比較し、マイナスイ面を改善することが急がれるのである。

九 外国語教育

日本人は果たして英語ができないのであろうか。英語ができていいるから、日本人は経済大国になったのであり、世界に進出している。経済の進出、学校教育、旅行などを通して、外国語を話す機会は増え、日本人は確実に言葉が上手くなっている。ところが、英語ができて「国際人」でない人が多い(本田 2008)のではないか。

これまで述べてきたように、コミュニケーションは単に言語に関する知識だけではなく、法律、習慣、政治、歴史、制度、組織論など、相手の国の文化についての知識が必要になってくる。なぜなら言語は「言語外の意味の総和の中でこそ機能するものだからである」(フィノキアロー・ブラムフィット 2008)。したがって、外国語と平行して、その国の文化についての教育も行わなければならない。これらを欠いた語学教育は、なされるべきではない。

また、コミュニケーションがうまく行かないのは、言語行動様式の違いからも来ていることはすでに書いた。外国語教育の目的はどこに置くべきだろうか。下村誠二は1982年10月に出した「東京大学における外国語教育」という研究結果報告書の25ページに、「外国語は世間一般には言語は単なる伝達の手段であり、一種の技能であるという通念がまかり通っている。大学教育までがそれに追従する必要はない」と書いている。これはまだ分かるとしても、「大学では外国語をそのものとして教えるのではなく、外国語を通じて言語活動の本質を反省し認識するように学生を導くべきだ」は行き過ぎではないか。技能の面を全面的に否定する必要があるだろうか。言語教

育は言語教育であつて、言語についての教育ではない。外国語教育と平行して他の文化に対する適切な態度を学ばねばならない。外国語教育で重要なのは、言語と言語外の知識とそれらを統括する言語行動の三つを合わせて習わなければならない。この意味で外国語教育は外国語態度教育でもある。

もし前述したような外国語教育がなされる場合は評価も変えなければならない。文字表現による成績認定から表現能力の成績評価へと、評価を変えることが肝要である。また対人関係と社会性を積極的に構築する能力も評価に入れなければならない。

ディベート教育、プレゼンテーション教育も必要である。語学が達者だからディスカッション出来るわけではない。批判精神、表現法など言語技術教育の学校への導入が必要である。

十 異文化理解教育

1 異文化理解教育

異文化理解教育も語学の教育と並んで行われなければならない。相手国の環境条件を知らなければ外国語教育はできないが、さらに異文化と接触するための正しい態度も学ばなければならない。しかしそのような異文化理解教育を行うに当たって注意しなければならない点がある。異文化理解教育は外国語教育を補完することは間違いないが、偏った異文化教育の持つ危険性、過度の一般化の危険性を同時に認識しなければならない。また異文化理解教育という名目で、実際には、外国の逸話やエピソード、自己の体験を語る恐れがある。この意味で、異文化教育は細心の注意を要する。過度の一般化を避けて、社会が多様であり、欧米と一つに括れない。どの社会も多様性と多価値を持っていることを学習することがとりわけ必要である。

異文化理解教育不要論がないわけではない。英語は特定の文化と結びつかない国際語である。したがって特定

の文化と結びつけた教育を必要としないというのが一つである。もう一つは英語文化に対する劣等感が植え付けられるというものである。文化は対等であって、こちらから歩み寄る必要はない。日本に来てても日本語や日本文化を学ぼうとしないアメリカ人は多くいるではないか等々。このような考え方は、西洋による言語植民地主義に苦しめられた、非ヨーロッパ言語話者には、一見、まことしやかに聞こえるかも知れない。しかしこのような考え方には、ややもすると、自己文化中心主義が入り込む危険性がある。

これまで述べてきたことから分かるように、異文化理解教育というのは、文化の違いを乗り越えて、コミュニケーションのできる積極的な態度と、異文化を受け入れ、外国の人も自分と対等であるという人間観を持つことになければならない。それも単なる知識にとどまることなく、行動様式とならなければならぬ。知識人といわれる人の中に、外国の人に心を開くことができず、行動様式とならなければならぬ。知識人といわれないと想像されるお百姓さんが、ごく自然に外国人と接触できたりしているのを目の当たりにすると、知識と行動は別だということが分かる。このことは日本に住む外国人の人からよく聞くことである。

異文化理解のもう一つの危険性としては、往々にして、違いにばかりに焦点が当てられ、また自然に違いばかりに目が行くことによって、他の国を不必要に異なる国だと描きやすいし、またそれゆえに、そのような国に行くと、変に身構えてしまうことになる。したがって、異文化理解教育には、いかに異なっているかだけでなく、いかに同じ点が多いかをも強調することが何よりも必要である。

自分と異なるシステムの中に身を置いたり、あるいは文化を異にする人と接触すると、日本的なものが失われるとか、アイデンティティーが犯されるとする態度は正しいとは言えない。文化変容を一切受けなくて、それでいて、相手の文化を理解できるようなそんな便利なものが果たしてあるのだろうか。虎穴に入らずんば虎兇を得ずというのは、異文化理解にも当てはまる。異文化理解ができる適応力とは、自己変容を恐れない態度の獲得で

ある。異文化理解とは自己変革に他ならないし、理解するとは、異なるものを自己に取り入れたことに他ならない。

2 異文化理解がなぜ必要なのか

私たちは前知識無しで、したがって偏見無しにものを見ることができない。そしてまだ理解できないものは、これまで理解してきたことを頼りに、知っているものの範疇に押し込めることで理解したと考える。つまり、相手を自己の中に体系化することで理解のプロセスは終了するのである。理解そのものはそのようなものかも知れないが、ここでは自分たちとは違う体系は否定されてしまう。

仮にそのようなプロセスがある程度は仕方ないとして許されるとしても、私たちが異なる文化を見る場合、果たして本当に全体を見ているのだろうか。自分たちの都合の良いものばかりを見ているのではなからうか。ここで問題にしたいのは、選択的知覚の問題である。私たちがものを見るときは、関心があらかじめ与えられており、見方があらかじめ与えられていることが多い。つまり、自己の見たいものを見るのである。その時に偏見を持っていたらどうであろうか、偏見が偏見をさらに生むことになる。

他の国に行っても、そのものの真実が見えないのはこのためである。いわゆる日本人論という書物はこのような病理に囚われたものが余りにも多いのである。ドイツ人の日本像、アメリカ人の日本像、韓国人の日本観、日本人の韓国・朝鮮観などについて書かれた書物が果たしてそれぞれの国の理解に役立っているのだろうか。

3 自己文化中心主義

他の国を見ると、どうしても自己と比較してしまう。比較する場合、相手との違いは単に空間的・時間的な差異だけだと考えることが多い。日本はその国に比べて遅れているとか、あるいは進んでいるとか、まだ日本の方が二十年進んでいるとか考える。異文化は自己文化の延長線上にあるとする態度である。世界は普遍的な目標を目

指していると考えるのである。この考え方は世界が共通の価値観、体系を目指しているとする限りにおいては正しいかも知れないが、実際はさまざまな価値観がある。この考え方は、一番進んでいると自負する文化圏の覇権主義に通じるものであり、自己文化中心主義に他ならない。かつてヨーロッパが世界をそのように考え、自分たちに似せて文化の移植を行い、相手の文化や言語や宗教などを破壊してきたし、日本も同じような誤りを犯してきた。

4 文化相対主義

けれども他方において、これとは全く別の考えが存在する。文化相対主義がこれである。世界の文化はそれぞれが異なっていることを承認しようとする態度がこれである。文化人類学などで、このようなアプローチは成果を収めたし、余りにも性急に異なる文化を、自己文化に当てはめて理解してきた誤りの是正に役立ったことは否めないが、相互に異なっていることの承認は、リビジオニズムを生み出す契機ともなった。相互に相手を対等のパートナーと認識することは当然としても、そこから出てくる結論、つまり相手は自分たちとは全く異なった文脈に属しており、異質であり、共通の価値観もないので、対話しても無駄だという考えは建設的ではない。このような考えから、日本異質論などが出てきたり、それに対する反動として、嫌米などの態度が出てくることになる。世界の文化はある普遍的な一点を目指して収斂するという前者の考えも、また相互理解が全く不可能な異質の文化が共存するという後者の考えも共に危険性を孕んでいる。この二つの全く異なっているが、ともに真の文化の共生を否定する考え方を乗り越えて、第三の道を模索することが必要である。

5 ステレオ・タイプ

私たちは自分の国は複雑で、単純に理解できるものではないと思っている。それは自分の国については情報は無数にあり、一つの意見に対して、それを否定する情報もあるからである。それゆえステレオ・タイプで自国を

説明できるかといえ、たいていの人はノーと答えるであろう。しかるに情報が制限され、あるいは部分的にしか入ってこない他の国に関しては、そのような単純化や類型化から出てきているステレオ・タイプで解釈することに、疚しさも躊躇いもないのは不思議である。マス・メディアがそのようなステレオ・タイプを助長し、それで生活している。いつまでもそのようなステレオ・タイプを維持することは精神の怠惰と知るべきである。ステレオ・タイプを打破するにはどうすれば良いのだろうか。

ただし、ある種の偏見も、相手国の文化を理解する最初の手だてとして、ある程度は有効であるし、それを全面的に否定できない。誰しも偏見を持たないことは不可能だし、たいていは何が偏見かも分かるはずがないからである。ただ、相手の文化への関心と愛情を持ち、理解する用意がある限り、それが偏見だったと気づき、是正することができはるはずである。このような努力を続ける限り、時間とともに、全体像が見えてくるし、自己の異文化適応能力が増大して、最初はあれほど異質で不可解と思えたものでも、それがだんだんと合理的な考えであると分かる。かくして二つの文化の間を歩き来するのに、ほとんど無駄なエネルギーを使わずに済むようになる。

6 異文化理解のために

異文化理解の重要な態度としては、まず第一に、違いの相互確認が必要である。そのためには感情移入能力と異文化にたいするセンシビリティの涵養が望まれる。第二に、自己の価値を絶対視しないことや、自己文化中心主義の否定を目指す必要はない。第三に、違いを乗り越えて努力する価値があることを自覚しなければならない。文化や文明の境界線を強調するだけではなく、それが克服されねばならないし、克服する価値があることとの確信をもつこと。第四に、自己の変化を恐れないこと。自己のアイデンティティーを賭さなければならない。自己のアイデンティティーの保持は、他者のアイデンティティーのネガティブな評価をもたらしやすい。なぜなら人間は自己を基準として他者を評価するものであるから。現在獲得しているアイデンティティーも、不断の変

化の中から新たなアイデンティティーを獲得してきた結果であることを知れば、不必要に恐れる必要はない。考えてみれば、私たちの祖父母の世代と現在の若者の差と、例えば現代のドイツの若者と現代の日本の若者の差と、どちらが大きいだろうか。第五に、相手が自己をどのように見ているかを正しく知ること。さもなければ相手が自己に対してどのような期待や偏見を持っているか分からないからである。第六に、そのようなステレオ・タイプの見方の背景を知ること。第七に、相手に自己を分からせる努力をすること。そのためには自己開示を恐れてはならないし、日本が多様性を持った社会であることを分からせ、日本人はすべて同じ行動様式を持っている訳ではないこと、かなりの部分については同じ価値観を持っていることを分からせる努力が必要である。ことさら日本の特殊性を強調することではなくて、日本の透明性を示さなければならない。第八に他の文化に開かれた人間を作る国際教育が必要となる。

十一 結び

異文化コミュニケーションの摩擦は、相手の社会システムと自己社会システムが衝突するすべての領域で発生する。このシステムには、言語、文化、経済、法律、社会、慣習、組織、制度、歴史などを含むのである。一見不可解なものでも、それぞれの国の長い歴史やテイスクルの中でできあがったものであって、他の文化の人間が軽率に判断を下せるものではない。また一見すると、言語でコミュニケーションが躓いているように見えて、その実、深いところで他の要素で摩擦を起こしており、現象面として言語にそのことが現れているだけに過ぎないことも多い。国際コミュニケーションというのはこれらすべてに係わっている。それらを知ってこそ、商業も、外交も、企業進出もうまく行くのである。そのような多方面の知識を前提とするだけに、異文化理解は果たして可能だろうかという疑問が生じるかも知れない。それは困難かも知れないが、私たちはこの疑問に不断に答え続

けなければならぬし、またそうする価値があることを確信しなければならない。

参考文献

青木 保1…『境界の時間』岩波書店1985

青木 保2…『日本文化論』の変容、戦後日本の文化とアイデンティティ』中央公論社1990

鮑戸 弘…『コミュニケーション、説得と対話の科学』筑摩書房1997

安藤貞雄…『英語の論理・日本語の論理』大修館1986

池上千寿子…『男女交際ってなんだろう』大修館1991

池上嘉彦、山中桂一、唐須教光…『文化記号論への招待』有斐閣1983

石原慎太郎・江藤淳…『断固「NO」と言える日本』光文社1991

インテック・ジャパン編…『海外適応型社員になる方法』マネジメント社1996

ウォルフレン・カレル1 (Wolfren・Karel van)…『日本(権力構造の謎)』早川書房1994

ウォルフレン・カレル2 (Wolfren・Karel van)…『人間を幸福にしない日本というシステム』毎日新聞社1995

小倉和夫…『西』の日本「東」の日本、国際交渉スタイルと日本の対応』研究社出版1995

大橋敏子他…『外国人留学生とのコミュニケーション・ハンドブック』アルク社1992

大林太良編…『文化摩擦の一般理論』巖南堂書店1982

岡部朗一…『異文化を読む』南雲堂1988

オクサール・E (Oksar・Eis)…『言語の習得』大修館1980

可兒鈴一郎・佐藤勉・佐藤高之…『日本人流国際プレゼンテーションの常識』中央経済社1993

河合隼雄…『中空構造の日本の深層』中公論社1990

金田一春彦…『日本人の言語表現』講談社1975

加藤英俊…『文化とコミュニケーション』思索者1977

北岡俊明…『ディベート、論争の技術』明日香出版社1992

金龍瑞…『日韓関係の再構築とアジア』九州大学出版会1995

草野耕一…『ゲームとしての交渉』丸善ライブラリー1994

- 楠根重和 1 : 『異文化理解と外国語』金沢大学教育解放センター紀要12号1992
- 楠根重和 2 : 『シュピーゲル誌と朝日ジャーナル誌から見た、日本人とドイツ人の言語行動に関する比較分析』金沢大学教養部紀要
人文科編28 1号1990
- 國廣哲彌編 : 『日英語比較講座、第4巻発想と表現』大修館書店1982
- クリステヴァ、ジュリア(Kristeva, Julia) : 『外国人、我らの内なるもの』法政大学出版社1990
- 栗本一男 : 『国際化の時代と日本人』NHKブックス1985
- 黒田東彦 : 『国際交渉 異文化の衝突と対応』研究社出版1996
- 国立国語研究所 : 『言語行動における日独比較』三省堂1984
- 小林哲也編 : 『異文化に育つ子どもたち』有斐閣選書1983
- 小林祐子 : 『身振り言語の日英比較』エレック選書1975
- 近藤誠一 : 『米国報道に見る日本』サイマル出版会1994
- 榑原英資編 : 『日米欧の経済・社会システム』東洋経済新報社1995
- 佐々木瑞枝 : 『日本語教育の教室から』大修館1990
- 佐野正之・水落一朗・鈴木龍一 : 『異文化理解のストラテジー』大修館1995
- 佐藤隆三 1 : 『グローバル・ユイズム』日本生産性本部1993
- 佐藤隆三 2 : 『日米新時代への決断』讀賣新聞社1991
- サリヴァン J J (Jeremiah J. Sullivan) : 『孤立する日本企業』草想社1995
- 芝垣哲夫 : 『言語と文化の構造』創元社1986
- 司馬遼太郎、ドナルド・キーン : 『日本人と日本文化』中央公論社1984
- 清水悦男 : 『コミュニケーション研究叙説』明治図書出版1984
- 杉本良夫、ロス・マオア : 『日本人論の方程式』筑摩書房1995
- 鈴木孝夫 1 : 『閉ざされた言語・日本語の世界』新潮選書1975
- 鈴木孝夫 2 : 『日本人の言語意識と行動様式』思想572、1972
- 高瀬保 : 『誰も書かなかった首脳外交の内幕』東洋経済新報社1991
- 竹内敏人 : 『言語とコミュニケーション』東京大学出版会1988

- 武田龍夫：『積極外交の条件、日本の外交』サイマル出版会1990
- 多田道太郎：『しぐさの日本文化』筑摩書房1972
- 鄭大均(チョンテギョン)：『新しい眺め合いは可能か、日韓パラレリム』三交社1992
- 田麗玉(チョンヨオク)：『悲しい日本人』たま出版1994
- 筑紫哲也編著：『世界の日本人観』自由国民社1986
- 松本好隆：『外交戦略』勁草社1993
- 辻村明、D.L.キンケード編：『コミュニケーション理論の東西比較』日本評論社1990
- デイルタイ：『解釈学の成立』以文社1973
- 外山滋比古：『日本語の論理』中央公論社1987
- トラッドギル、P.(Tudgil, Peter)：『言語と社会』岩波新書1975
- 直塚玲子：『欧米人が沈黙する時』異文化間のコミュニケーション 大修館1980
- 中野道雄、ジェイムズ・カーカップ：『日英比較ポディ・ランゲージ事典』大修館1985
- 中基・楠根・ウィーガント：『ドイツ人の日本像』三修社1987
- ニーマン、ミヒヤエル：『日独の報道に表れるイメージ比較』ベルリン日独センター1988
- 日本文化会議編：『国際誤解の構造』PHP研究所1979
- ネウストブニー、J.V.：『外国人とのコミュニケーション』岩波新書1982
- 野村雅一：『しぐさの世界』NHKブックス1983
- 蓮實重彦・山内昌之編：『文明の衝突か、共存か』東京大学出版会1995
- ハヤカワ、S.I.(Hayakawa, Samuel Ichije)：『思考と行動における言語』岩波書店1985
- ハンチントン1(Huntington, Samuel)：『文明の衝突』中央公論1993年8月号
- ハンチントン2：『文明の衝突』批判に応える』中央公論1993年12月号
- バーンランド、デイーン(Burnland, D. C.)：『日本人の表現構造』サイマル出版会1979
- ピーターセン、マーク(Petersen, Mark)：『続日本人の英語』岩波新書1990
- フィッシャー(Glen H. Fisher)：『異文化を越えて』ELBC出版部1977
- フィノキアロー・プラムフィット(Finochiaro, Mary/Brunft, Christopher)：『言語活動中心の英語教授法』大修館1989

- 福田 健：『交渉力』を鍛える本』三笠書房1996
- 藤倉皓一郎・長尾龍一編：『国際摩擦、その法文化的背景』日本評論社1989
- 古田 暁監修 1：『異文化コミュニケーション、新・国際人への条件』有斐閣1987
- 古田 暁 2：『言葉の教育と文化の教育、異文化コミュニケーション論から』『言語』（1989年10月号）大修館
- 古田 暁（監修） 3：『異文化コミュニケーションキーワード』有斐閣1990
- 彭 飛 1 (Peng Fei)：『外国人を悩ませる日本人の言語習慣に関する研究』和泉書院1990
- 彭 飛 2：『ちよつと』はちよつと』講談社1994
- 細谷千博：『日本外交の軌跡』日本放送出版協会1993
- 本田喜範：『英語と文化交流』近代文藝社1994
- 本名信行その他：『異文化理解とコミュニケーション』三修社1996
- 松田毅一 1（監訳）：『十六・十七世紀イエズス会日本報告集』第三期第六集同朋舎出版1991
- 松田毅一 2・E・ヨリッセン：『フロイスの日本覚書』中公新書1983
- 森田昭夫・石原慎太郎：『NO』と言える日本』光文社1989
- 森 巨その他：『異文化への理解』東京出版会1988
- 宮智宗七：『日米法律摩擦——感覚のギャップは埋めれるか』中央経済社1994
- 宮本倫好：『日・米ギャップの真因、日本はなぜ孤立するのか』産能大学出版部1991
- 矢野 暢：『国際化の意味、今国家を越えて』NHKブック1986
- 山口 修・齋藤和枝編：『比較文化論』世界思想社1995
- 山崎正和：『日本文化と個人主義』中央公論社1990
- 渡辺昭夫編：『戦後日本の対外政策』有斐閣選書1985
- Bates, Egon: Vorträge, Leske Verlag 1978
- Bausinger, Hermann: Alltagskultur als Lernproblem, In: Vorderwülbecke/Wintermann: Materialien Deutsch als Fremdsprache Bd. 16, DAAD 1979
- Bolten, Jürgen: Interkulturelles Verhandlungstraining, In: Jahrbuch Deutsch als Fremdsprache 18(1992)
- Bornschuer, Loihar: Germanistik - international, interkulturell oder randständig? In: Jahrbuch Deutsch als Fremdsprache

13(1987)

Bremer Kollektiv: *Grundriß einer Didaktik und Methodik des Deutschunterrichts in der Sekundarstufe I und II*, Metzler Verlag

1978

Coulmas, Florian: *Conversational Routine*, Mouton Publishers, 1981

Ehlers 1, Swante: *Sehen lernen*, In: *Jahrbuch Deutsch als Fremdsprache* 14(1988)

Ehlers 2: *Kultureller Abstand und Textverstehen*, In: Neuner, Gerhard (Hg.): *Kulturkontraste in DaF-Unterricht*, iudicium

Verlag 1988

Fix, Ulla: *Sprache: Vermittler von Kultur und Mittel soziokulturellen Handelns*, Info DaF 18,2(1991)

Gerrighausen, Josef und Seel, Peter C. (Hrsg.): *Interkulturelle Kommunikation und Fremdverstehen*, Goethe-Institut 1983

Gutenbergl, Norbert: *Interkulturelle Kommunikation in Organisationen*, In: *Jahrbuch Deutsch als Fremdsprache* 18(1992)

Jaworski, Adam: *The Power of silence, social and pragmatic Perspectives*, Sage Publications 1993

Kawasaki, Ichiro: *Japan unmasked*, Charles e Tuttle Company Rutland 1987

Krusche 1, Dietrich: *Das Eigene als Fremdes*, In: *Zeitschrift für Erziehung und Gesellschaft* 23. Jahrgang/Heft 1, Januar/

Februar 1983

Krusche 2: *Japan konkrete Fremde*, S. Hirzel Verlag 1983

Lebra, Takie Sugiyama: *The cultural significance of silence in Japanese communication*, *Multilingua*, (6-4), 343-357, 1987

Meyers, Albert: *Drei Thesen zum Deutschunterricht für Ausländische Studien aus der Sicht eines Ethnologen*, In: *Materialien*

Deutsch als Fremdsprache Bd.16 1980

Morsbach: *Transcultural understanding and modern Japan*, Studienverlag Dr. Norbert Brockmeyer 1983

Müller, Bernd-Dietrich: *Interkulturelle Verstehensstrategien - Vergleich und Empathie*, In: Neuner, Gerhard (Hrsg.):

Kulturkontraste in DaF-Unterricht, iudicium Verlag 1988

Schnitz, Heinrich Walter: *Ethnographie der Kommunikation*, In: *Materialien Deutsch als Fremdsprache* Bd.16 1980

Seel, Peter C.: *Interkulturelle Kommunikation und Fremdverstehen*, iudicium 1986

Takayama-Wichter, Taeko: *Japanische Deutschlerner und ihre Lernersprache im gesprochenen Deutsch*, Peterlang 1990